

## ある少女の旅立ち

昨夜9時45分、14歳の少女が、(彼女曰く)”自分を鍛え直すため”、海外(英語圏)留学に旅立った。

今年8月15日、彼女の両親から依頼を受け、般若のTシャツ姿でしゃこたんのスカイラインで来た伊藤幸弘さん(当時、元暴走族「相州連合」2代目総長・非行カウンセラー)と落ち合い、彼女の家に向かった。彼女の家では、彼女と外国籍の友達と、それぞれの両親が待っていた。車中、伊藤さんから「今日は私が話をしますので、先生(私)は、黙ってて、私の呼びかけには『はい、はい』と答えて下さいね」と言われた。私からは伊藤さんに、彼女たちの様子を伝えた。学校をさぼっては、男の子たち5,6人従えて、真昼間バイクで学校のグラウンドを走り回る。夕方からは、その友達や3,4人の女の子たちも加わり、順番に仲間の家に集まり、煙草を吸うは歌を歌うは、駄弁り合う。

家に着くと、伊藤さんと私を挟み、左側に彼女とその友達、右側にそれぞれの両親が向かい合った。早速伊藤さんが「まずは包み隠さず、お互いに言いたいことを聴かせてください。」と言うと、堰を切ったようにバトルが始まった。10分位経ったか、彼女たちが「くそじじい、くそばああ」と叫ぶと、伊藤さんはドーンと座卓を思いっきり叩いた。一瞬の沈黙が起った。彼女たちに向かって「てめいら、言葉を慎め!いくら言いたいことを言えと言ったって、礼儀をわきまえろ!この先生(私)はじっと黙って我慢してるが、俺より怖いぞ。(私、「えっ?」)自分の親に向かって、『くそじじい、くそばああ』とはなんだ!」彼女たちは震え上がった。般若のTシャツの伊藤さんの罵声に、それより怖いと言われた私を見て。

お互いに日頃の不満や言い分を出し切った後、伊藤さんが仲裁に入った。「いくら寂しくても、真昼間学校をさぼってバイクを乗り回す、中学生の分際で煙草を吸う、これはよくないぞ。なっ先生。」私、「っはい」。彼女たちの両親は、「えっ!寂しかったの?」と口を揃える。

伊藤さんはその両親たちに向かって、彼女たちの気持ちを代弁した。共に共働きの親で、夕食はひとり黙って食べる毎日。学校であったこと、友達としたこと、嬉しかったこと、悲しかったことを話す相手がいない。そんな寂しい依存心から攻撃的な行動に出てしまった。彼女たちの両親はやっと、娘たちの気持ちを理解した。

そして、彼女たちは伊藤さんと私宛に、「①携帯電話は5千円以上使わない。②煙草は吸わない。③勉強する。以上、一つでも守らなかったら、伊藤さんと私の如何なる指示に従う。」旨の念書を書いた。両親たちには、できれば両親とも、どちらか一方でも、夕食は一緒に食べるよう仕事を調節してもらった。

彼女は仲間たちとの関係を遮断するため、三つ離れた町の寮に入り、学校の出席認定を得て勉強を始めた。母親は毎日寮に来て夕食を共にし、週3日は泊まってもらった。元来自頭がいい彼女は、教科書と副教材で勉強し、解けなかった問題は解けるようになるまで何回も解くという、彼女のスタイルを身に付けていった。大学生のリーダー二人を、毎日交代で付

けた。

ところが、11月になって彼女が煙草を吸ったことが発覚した。伊藤さんは私に判断を預けた。そうなる、私の如何なる指示に従わなくてはなり、寮を飛び出し市内に逃げた。親に捜索願を出してもらい、警察と一緒に探した。ようやく見つけたが、彼女は寮のトイレに逃げ込み、鍵を閉めた。警察官の立ち合いの元彼女に、得意な英語を活かした提携する語学学校の海外留学で説得した。1時間ほどで彼女は鍵を開け出てきた。一緒に活動したリーダー二人に涙で見送られ、伊藤事務所のスタッフと東京に向かった。

この2ヶ月半で彼女は随分変わった。ご両親に対する態度以外は。これからの海外留学9ヶ月で、彼女はまたどれだけ成長してくるか楽しみだった。

中学生であることから3か月毎の帰国は許されたが、彼女は翌年4月まで帰らず、語学学校で勉強した。進学能力試験を受け、地元で一番の高校進学が内定した。部屋に荷物を残し、帰国した。

ところが、帰国すると彼女は親元での生活が恋しくなり、なかなか海外留学に戻らない。結果、海外高校合格内定を蹴り、中卒で行ける専門学校進学を決め、残した部屋の荷物の処分を現地事務所に依頼した。

2年で国家資格を取った。でも、それでは飽き足らず、彼女は大学進学を望んだ。しかし、大学進学となると、あと1年の高等教育機関在籍と高校単位取得が必要になる。そこで、提携する通信制高校で1年で高校修了の74単位を取得した。それこそがむしやりに頑張った。母親から「うちの〇〇（彼女の名前）は、食事とお風呂しか部屋を出ない。ずっと部屋に居て、外出もしない。先生、ひきこもりになっちゃった。」と電話をもらった時があった。すぐ彼女の携帯に電話すると、「せんせい！久しぶり！」と、ひきこもり声にあらず、明るい声。「おい、毎日毎日、食事と風呂しか部屋から出ず、何してんの？母さんが心配して、おれんどこに電話をしてきたよ。」と伝えると、「当たり前じゃん、せんせい、1年で74単位だよ。毎日毎日、教科書を読んでレポートを書く。時間がなくて、食事や風呂の時間も、寝るのももったいない。んたく〜。いい加減、娘を信じてよ。」と返ってきた。「しょうがない。君の過去が過去だけにね。」とつまらんことを言ってしまうと、反省。「いいよ〜。せんせい、私、〇〇大学で心理学を勉強するよ。」とびっくり。その旨を母親に伝えると、「娘を信じない私達も反省しなくてはねえ。」と笑った。

その言葉通り、〇〇大学に進学し、社会福祉士の資格も取り、今は1女兒のママとして働いている。